追悼文

物故者への追悼文

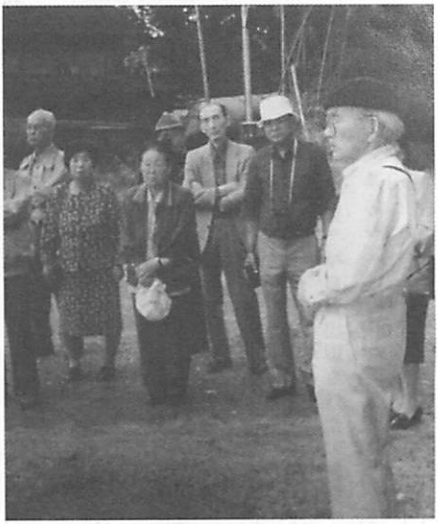
佐伯史談会会長　佐藤　巧

○いつまでもあこがれの軸丸勇先生

当会顧問軸丸勇氏は今年五月に百寿を迎えられ、当会も遅ればせながら記念品を贈ったが、届かぬうちに訃報が入った。六月三日、三重町の葬祭場には宇目町民をはじめ数百人が参列して先生の遺徳を偲んだ。

先生は佐伯市青山出身で宇目町千束に自動車修理工場を開業して五〇年になるという。佐伯史談会には昭和四十七年に入会しているので五十六年間在籍されていた。その間、常任評議委員として研修部を担当され県内外の史跡巡りは感動的であった。また「佐伯史談」の表紙写真と解説も担当されていた。

私が入会した昭和五十八年当時、先生が編集した『ふるさとの想い出写真集（明治・大正・昭和）佐伯』を入手した。「城下町佐伯の町づくり」に取り組んでいた折柄、大変参考になり挿絵にも随分利用させてもらい、未だに座有の一冊となっている。



球磨地方にて説明する軸丸勇先生（右）

先生は不思議な魅力を持っており、女性会員や我々若者にも評判がよかった。いつも身だしなみは小ざっぱりと、軽快なスーツの下は白いワイシャツに吊りバンドとベレー帽に棒ネクタイなどが特徴的で、アメリカンフロンティアを感じさせるダンディな風貌である。普段は温和で無口、時折はにかむように笑った。コーヒーは角砂糖三つの甘党であった。

会誌の表紙写真と軸丸勇先生（右）

そんな人柄に魅せられて我々は何度も宇目を訪れた。蔵書に満ちあふれた書斎、技術屋らしく最新の機器を導入して、写真の現像から編集・印刷・製本まで自ら手がけようとしていた。今のようにパソコンのない時代である。家業を息子達に譲って悠々自適の生活がうらやましく目に映った。

かといって、先生は書斎の虫と言うよりは、地の利と機動力を活かして「何時でも何所へでも」、出かけ案内する行動の人であった。特に石造美術に関しては県下に名をとどろかせ、南郡町村誌の執筆等を手がけられた。また宇目町の文化財行政を牽引した功績は偉大というほかない。

最後にエピソードを一つ、先生が『木浦鉱山遊女哀史』を大分合同新聞に連載して話題となったとき、「執筆料は？」と問われて、「一銭も出ん、合同新聞ならぬ強盗新聞じゃ」と笑い飛ばしていた。最近は私もすっかりご無沙汰していたが、会員戸高氏や久保彰三先生が訪れて、この『木浦鉱山遊女哀史』を復刻されたので、先生もさぞお喜びになられたことであろうと、二人には感謝申し上げたい。

○熱血漢の木許博先生を偲ぶ

木許博先生は大正十五年、佐伯市木立に生まれた。高等学校教諭となって県内を転任、佐伯豊南高校校長を最後に昭和六〇年に退職された。その後心臓の大手術を受けて療養中、同級生の汐月三代吉氏（元会長・故人）から碑文の解読を依頼されたことが契機となり、平成二年に佐伯史談会に入会されている。

一般に金属や岩石、瓦などに刻まれた古代の文字や記録を「金石文」というが、先生が取り組んだのは寺庵に建てられた供養塔や墓石、あるいは記念碑に刻まれた銘文など江戸期のものが中心である。これらは漢文や漢詩で構成され、仏教用語を含んだものは更に難解である。先駆者としては弥生町益田学先生（故人）の『郷土佐伯の碑文』がある。

木許先生が解読に取り組む姿は、子供のように無心で、一言一句に没頭して辞書をめくる。一字の解釈に時日を費やすこと度々、納得のいく解釈が得られると満面の笑顔で喜々と語った。碑文の拓本は同会員宮下良明氏（故人）が、編集は汐月三代吉氏が担当したが、原文にこだわる先生の意図を受けて、異体字の作字に苦労されたようだ。

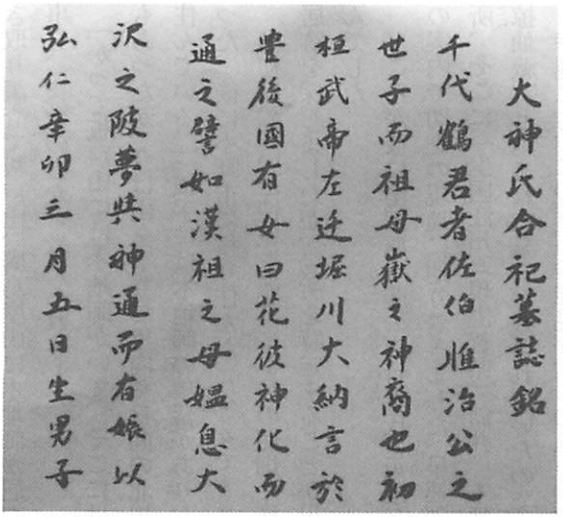
かくして二十四基の碑文を収録して、平成十一年十二月に『佐伯碑文の解読』が自費出版された。碑文の内容は全て貴重な郷土史料となり得るものであるが、私にとって特に印象深かったのは、天真善理道庵主墓碑銘（戸穴大宮）・大神氏合祀墓誌銘（堅田西野）・恩誉俊霊上人墓碑銘（樫野）・梅城訪古歌（明石秋室）・虹澗橋記（野津町）などである。

その後平成十九年、善教寺「布岳展」を機会に漢詩の解読をお願いし、引き続いて『東瀛詩選』や『新詠詩日本史』の中島子玉や広瀬淡窓の漢詩にも挑戦していただいた。かれこれ四～五年の歳月が経過し、その頃から先生は手が震えて字が書けなくなり、急速に体力と気力を失っていったようだ。その間、私も見よう見まねで自分なりの解釈で松下筑陰の『窈窕篇』をものにした。以上の解読書三冊を日田市の咸宜園教育顕彰事業に応募、優秀賞を賜ったのも先生のお陰であったと感謝している。

最後に木許家を訪問したのは二年ほど前、先生はやっと起き出してきて、胸を押さえながら「息がしにく

い」と、話すのも辛そうにしていた。やがて夫妻共に不在となり、音信が途絶えたままになっていた。ところが、今五月下旬に唐突に訃報に接した。久住の高齢者マンションで療養中に亡くなられ、葬儀はかつての教え子である臼杵の見星寺に依頼したと言う。初盆に里帰りした御遺族に話を伺い、先生の御位牌に手を合わせて永久の別れを告げた。行年九〇才、佐伯史談会員歴二十六年。

樫野にて「善理道庵主の墓碑銘」を説明する木許博先生



大神氏合祀墓誌銘
千代鶴君者佐伯惟治公之
世子而祖母嶽之神裔也初
桓武帝左遷堀川大納言於
豊後國有女曰花彼神化而
通之譬如漢祖之母媼息大
沢之陂夢與神通而有娠以
弘仁辛卯三月五日生男子

木許博先生の遺墨「大神氏合祀墓誌銘」の冒頭
千代鶴君は佐伯惟治公の世子にして祖母嶽の神裔なり。桓武帝の初め、堀川大納言は豊後国に左遷、花という女あり…。